浪江のこころ通信

・第110号・

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

〝浪江のこころプロジェクト〟は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信（※1）」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム（※2）が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話しした「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第110号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240(34)4593

浪江町花卉（かき）研究会

代表　川村　博さん（幾世橋）
荒川　勝己さん（加倉）
菅野富美恵さん（北幾世橋）
鈴木　好道さん・幸子さん（苅宿）

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ　古山・松田
取材日：５月22日

花作りで浪江町を再興するために、これからも力を合わせて花を作る

浪江町内で花卉栽培に取組む農業者や事業所に加え、新規就農者でつくる「浪江町花卉研究会」の月例勉強会にお邪魔し、中心的なメンバー４人と、出席された鈴木さんの妻、幸子さんも交えてお話を伺いました。

当日は、「新型コロナウイルス感染症」の予防のためマスクを着けたままではありましたが、楽しく、にぎやかなグループインタビューとなりました。

鈴木幸子さん

鈴木好道さん

菅野さん

荒川さん

川村さん

◆あの日の避難から浪江町に戻られた経緯を簡単にお聞かせください

菅野さん　震災前から室原川・高瀬川漁業協同組合で仕事をしていて、その頃から川村さんをよく知っていました。

伊達市保原町で避難生活をし、その間も通いながら、放流や放射線量の測定など川の仕事を続けていましたので、平成29年３月31日の一部避難指示解除とともに、浪江町に戻りました。

川村さん　（第30号「平成25年12月号」掲載）

福島市に避難しましたが、すぐに南相馬市に移りました。震災から２年目、以前から運営しているＮＰＯ法人Ｊｉｎの事務所周辺が避難指示解除準備区域に再編されたことをきっかけに、平成25年４月１日に浪江町に戻りました。

最初はニワトリを飼って卵を出荷したり、野菜を作ったりしましたが、野菜から高い放射線量が検出されたことがきっかけとなって、震災後の３年目から花作りを始めました。

鈴木さん　震災直後は埼玉県に20日ほど避難し、その後、いわき市で暮らしました。苅宿の実家の母屋は解体しましたが、離れをリフォームして住んでいます。妻は、母が元気で小名浜にいますので、まだ向こうにいます。私も週に１～２度くらいはいわき市に行っています。

避難指示解除になってから、浪江町で何か仕事をしたいと考えていたところ、川村さんの花作りを知り、平成30年８月頃から準備を始めました。地元農家に２反歩ほどの畑を借り、ハウスでの花作りに取り組み出したのは、その年の10月からでした。

荒川さん　（第89号「平成30年11月号」掲載）

秋田県に避難しましたが、一部避難指示解除後の浪江町で農業を再開したいと思い、平成29年４月から、準備のために毎月のように浪江町とを往復していました。翌年１月に戻り、作付けを開始しました。

もともと請戸で栽培していた鉢物に加え、新たにトルコギキョウなどの切り花を始め、その品質向上を図るために研究会に入りました。

◆浪江町花卉研究会のいきさつや現在の取組などについて教えてください

川村さん　花作りで町に貢献したいと、避難先から浪江町に通ったりしていた私たちが、勉強のために集まり出して２年目に、役場から農業者組織を作ったらどうかと言われたんですよ。原発事故の被災地からの再起を図るために、浪江町を花の一大産地にすることを目指して、平成29年８月19日に「花・夢（む）・創（そう）みらい塾　浪江町花卉研究会」を立ち上げました。

みんなでいい花を作るために、肥料や水やり、温度管理、花の仕立て方など、技術向上と情報共有のための勉強会を月１回開催しています。花卉農家や新規就農者などが集まって熱心に学び合うため、いつも２～３時間になっていますね。

中心メンバーは今日の出席者を含めて６人ですが、今年度中には花卉農家８人と一つの事業所、合わせて９件になる予定です。その他に、十数人のオブザーバーや応援者などがいます。

インタビュー風景▶

鈴木さん　震災前はアパレルの製造会社を経営していて、震災後は中国やインドネシア、ベトナム、ミャンマーなどへ技術指導や工場管理に行っていた時期もありました。

でも花のことは全くで、トルコギキョウすら知らなかったんです。いざ始めてみると、難度が高い品種というか、誰も彼もが簡単に作れるものじゃないと思いました。ハウス栽培でしか作れませんから、設備投資も必要です。この花は一通りの知識を得たり、勉強したりしないと作れない。だからこそ、市場に出しても値崩れが少ないのでしょう。

女性を美しく装う仕事をしてきたので、美しい花を作ることは「美」という点で共通していて、うれしいですね。

菅野さん　北幾世橋の自宅前で、水田を転用した畑をお借りして作っていますが、作る土地が違うと同じことをやってもうまくいかないことも多いので、勉強会で川村さんからいただく中身の濃い資料を確認しながら、いろいろ試しています。メンバーの皆さんも、なかなか教えていただけない花レシピの〝キモ〟まで惜しげもなく情報をシェアしてくださいますし、何かあったら駆けつけてくださいます。相談できる仲間がいて、トラブルがスピーディーに解決できる。皆さんがいなければ、花作りはやれていません。

先ほど、以前から川村さんを知っていたと言いましたが、誰も浪江に帰って来ない頃から花作りに取組む、どっしり根を構えたような川村さんの姿や、その活動を取り上げた新聞記事などはいつも気になっていました。研究会の立ち上げを知って、私もその一員になりたい、川の仕事とは別に、私自身の仕事として花作りがしたいと思い、参加しました。川村さんや事務局長の清水さんに憧れているんですよ。

荒川さん　加倉で花作りを再開した時に建てた３棟のハウスに加え、新しいハウスも使って仕事をしています。今、花木はサンゴミズキやヒュウガミズキ、ウンリュウヤナギなど４種類、切り花はメインのトルコギキョウ、ラナンキュラスやストックなど３種類ほど。栽培を始めて３年目のゴクラクチョウカ（ストレチア）は、今年花が咲くはずです。その他にも試作中の品種があります。

農家は一人一人の仕事ですから、研究会の和気あいあいとした人の輪は本当に大切ですね。特にハウスでは独りきりですから、このメンバーのような温かい人たちと話ができることは大事です。

◆最後に、皆さんから花作りへの思いを聞かせてください

川村さん　浪江町の花作りをずっと応援（おうえん）いただいている華道家の假屋崎省吾（かりやざきしょうご）さんが、来年のカレンダーに浪江の花を載せてくださるそうです。役場もフラワープロジェクトとして動画配信をしてくれるなど広報してくださって、本当に励みになります。

また、来年の東京オリンピック・パラリンピックで、メダリストたちに贈られる「ビクトリーブーケ」に福島県産のトルコギキョウが使われることが決まっていますが、浪江の花をいつでもエントリーできるよう、最高級の花が出荷できる態勢を十分に整えておきたいですね。

浪江ブランドの確立を目指して、今は栽培技術の取得や向上が一番。メンバーの経営を軌道に乗せるお手伝いはもちろんですが、若い人たちが花で生活ができるように、応援もしていきたいと思っています。

菅野さん　基本通りにはなかなかいかないし、難しいことも多いですが、品質の良さを目指して基本に忠実に取り組んでいきたいですね。

荒川さん　まず、きれいな花を咲かせたい。丈夫で長持ち、しかも高く売れる花作りを目指したいです。

鈴木さん　健康で少しでも長く、花を作りたい。80歳、いや、父が畑仕事をしながら90歳まで長生きしましたから、85歳かな。品質の高い良い花は作っていても楽しいし、ストレスがたまりません。「鈴木さんの花が欲しい」と言われるような花作りがしたいですね。

夫婦でできる仕事として、妻とも同じ目標を持ちながら、一緒に人生を歩いていきたいです。

▲取材終了後、参加者が１人加わって、すぐに勉強会が開始。ちなみに記念すべき第１回は、平成30年４月30日に行われたそうです